慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ブランキの階級闘争説とプロレタリヤ独裁説
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.2 (1931. 2) ,p.203(75)- 258(130)
JaLC DOI	10.14991/001.19310201-0075
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310201-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

講壇社會主義論戰は大體に於いて以上の如くであつた。筆者は、E・コンラッドと共に論戰が多くの場合に於いて、然る樣に、論爭當事者の所說が誇張され勝ちなるを認めると共に、往々論爭そのものが、無意義な方面に走り易すきを慨嘆する。此の論爭によつて何を得たか、經濟學方法論上の問題は今暫くおくも、第一の點として、講壇社會主義者の主張が漸く世間的になつた事は否定し得ない。即ち是等の人々の講演又は勞作は、主として時事問題に關係があつた。此の問題を時事的に解決する事に「科學的」努力を拂つた。從つて、學界のみならず一般思想界を支配してゐた、從來の自由主義經濟學にとつては、こゝに脅威が生じた。しかも其の脅威は、社會主義のそれとは異つて、改良主義的な性質上、より大きな圈層に弘布する性質を有した。茲に論戰が生ずる根本の動機があつた。そして其の結果は、思想界の大勢を、講壇社會主義の旗幟に有利ならしめんとし「社會政策學會」成立の可能を豫想したと云つて差支あるまい。シュモラアが新傾向の決定的勝利について公言した事情は「社會政策學會」の成立の項目に讓るであらう。（昭和六年一月末日稿）

ブランキの階級鬪爭說とプロレタリヤ獨裁說

平井　新

目次

一、序論
二、階級鬪爭說
三、プロレタリヤ獨裁說
A、獨裁の樹立
（イ）政權の略取
（ロ）政權略取の方法
（ハ）獨裁の思想
B、獨裁の任務
（イ）ブルジョワジイとの絕緣――プレロタリヤの武裝
（ロ）普通選擧の延期
（ハ）國民敎化の事業
（ニ）敎會、宗敎の破壞、ブルジョワ新聞の抑壓

（ホ）過渡期の政治的、經濟的、財政的、教育的政策

四、ブランキ文獻小錄

一　序論

オオギュスト・ブランキはジロンド黨に屬する國民公會の代議士、ジャン・ドミニイク・ブランキを父として一八〇五年二月八日 Puget-Théniers に生れた。ジャン・バッチスト・セエ及びデュポン・ド・ヌムウルの學徒にして「經濟學説史」の著者として高名なる經濟學者アドルフ・ブランキは彼の兄である。父ドミニイクの學者的、革命家的素質はこの二子に依て別々に繼承せられたのであつた。(1)

フリイドリッヒ・エンゲルスはオオギュスト、ブランキを評して曰く

『ブランキは元來政治的革命家であり、國民の悲歎に同情を持つ感情のみに依る社會主義者である。然しながら社會主義の理論も持たなければ、又社會救濟の一定の實際的提案をも持たない。ブランキは其の政治的活動に於いては元來「行動の人」であつて、正確な瞬間に革命的奇襲を試みるところの甘く組織された少數の人々は最初二三回の成功に依て大衆を自分の味方に獲得し、かくして革命の勝利を造り出す事が出來るとの信念を持てゐる人である。……ブランキは前代の革命家たる事がわかる』と。(2)

エンゲルスの評言は吟味を必要とする。エンゲルスが上記の如く、ブランキを評して政治的革命家、「行動の人」となし、少數者の革命的奇襲に依て革命の勝利を造り出すことが出來るとの信念をもつ人となしたのは正しい。然しブランキには社會主義の理論も社會救濟の一定の提案をも有たないといふエンゲルスの評言は明かに肯綮を失してゐる。マルクス體系の高莊なる殿堂に比すれば固よりブランキのそれは粗野なる一茅屋にすぎないであらう。事實、其生涯の殆んど大部分を革命と繫獄の裡に送つたブランキは自己の體系を大成すべく思索、反省の遑を持たなかつた。しかしこの事は直ちに彼に『社會主義の理論も社會救濟の一定の提案をも持たない』ことを意味するものではない。これを實證するものは彼の主著『社會批判』以下多數の論作である。エンゲルスの評言は唯單にマルクス主義者の代表的批評として看過する事は出來ない。世のブランキを論ずる者、多くはエンゲルス的評言に甘んじて自らブランキの著作について其眞僞を糺さうとするものはない。ブランキズムが革命的方法の代名詞とのみ看做されてゐるのは、かゝる不詮索のためである。成程革命的方法はブランキの異色ある點である。然しそれは彼の社會主義體系の一片鱗にすぎないのである。

ブランキは現代に存在の理由を失つた『前代の革命家』であるとして逸し去る事が出來るであらうか。ブランキズムの再評價を必要ならしめたものはロシヤ大革命である。ロシヤ革命はマルクシズムに準據する革命であると言はれ、レエニン又自らマルクスの正統の信奉者を以て自任する。しかし名は毫も其實を改むる事は出來ない。プロレタリヤ解放の物質的條件よりも寧ろ政權の略取換言すれば革命的意思を强調するボルシェヴィズムはマルクシズムより寧ろバブウフ主義に近い。而してブランキズムはバブウフ主義の正子である。ブランキズムが甦生したのはこのためである。此十年間、ブランキ研究の多く現はれたのはこの間の消息を物語るものであらう。其主なる者を擧ぐれば、――Zévaès,—Auguste Blanqui (1920), Dommanget,—Blanqui (1923) Goryey,—Auguste

Blanqui. (1921) Velichnika,—Blanqui, (1921) (後の二冊は露文)等である。

要はエンゲルス的評言に禍されて、不注意に看過され、不當に歪められてゐたブランキの教義を再び周到に觀察し、それを矯正し且つ再評價する事である。筆者の目的が果して達成せられたか否かは別として、少くとも筆者の意圖はその點にある。

因に本稿は(一)略傳、(二)經濟學批評、(三)階級闘爭説、(四)プロレタリヤ獨裁説、(五)共産主義の本質、(六)諸社會主義學派批評、(七)ブランキとインタナショナル、(八)マルクスとブランキ、(九)ロシヤ革命とブランキズム、(十)彼の社會運動等の項目より成る拙稿「ブランキの社會主義體系」の中、(三)及(四)に該當する部分である。

(1) Geffroy, G.—L'Enfermé. Édition revue et augmentée. Paris, 1926. Tome I. p. 7-8

(2) 邦譯、マルクス、エンゲルス全集、第十二卷一二七頁。

二、階級闘爭説

(一)

ブランキの階級闘爭説が彼の他の見解と同じく、其根本觀念に於いては師父バブウフの流を汲めるものであることは慥かである。然しブランキは先師の見解を其の儘繼承するものではない。時代的制約を背負はされて尚、粗雜未熟たるを免かれなかつたバブウフの見解はブランキの手に依て著しく擴充展開せられて、其規模の大となれる、其敍述の精細となれる、其系統の整然となれる、到底昔日の比ではない。

(二)

人類生活の史前原始の時代に共産主義の存在を想定することは、其當否は姑く措き、久しく多くの社會學者經濟學者の企てし處である。バブウフやマルクスも亦其の轍を踏む。然るに豫ねてバブウフの流を汲むブランキは此原始共産主義存在説に斷乎として反對するものである。

ブランキ謂へらく、經濟學者は、野蠻人は共産主義の生活を營む、從て共産主義は野蠻狀態であると結論するのが常である。此主張は果して如何なる根據に基くものであるか。其れは無根據である。原始人類の共産主義は笑ふ可き誤謬である(1)。曰く、

『共産主義は社會の幼稚時代であつた。從つて、それは社會發展階段の中で其最も低い階段を表示す可きであるといふことは虚僞である。是等の主張は眞理の正反對である。全歴史は永久に是等の主張を否認する』と。(2)

人々は共産主義が原始時代に行はれて居たといふ證據に土地の共有、非分割の事實を擧げる。然し此主張も亦嗤ふ可き議論である。耕作せざるものを何のために分割す可きであるか。それは現代の國民が太洋を分割せざるが故に、彼等は共産主義生活を營めるものであると主張するのと毫も相選ぶ所がない。オオストラリヤ土人は土地を分割してゐないが故に共産主義者であるか。何故に分割しないのか。彼等がこれを利用しないからである。荒蕪地の共産主義は文化の共産主義ではない。又其反對も眞である。一方に於いては勞働が全く缺如してゐるが他方に於いてはそれが完備してゐる。狠は群をなして森野を彷徨せるが故に共産主義者であるか。(4)　回答は明白ではないか。

『共産主義を構成するものは未耕地上の放浪では無く、それの共同耕作にあるのだ。』(5) 土地の非分割は共産主義の徴證ではない。却て其分割こそ共産主義への一大淵歩であつたのである。

かくして原始人類の間に行はれたものは、決して共産主義ではなく、實は極端なる個人主義であつたのである。蓋し、共産主義は人智の最高の産物であり人類發展の窮局の階段であつて、原始社會の無智蒙昧と到底相容れるものではないからである。かゝる狀態に照應するものは個人主義である。社會の最初の搖藍は實に此の個人主義である。曰く、

『常に且つ何れの國に於いても個人主義は社會の最初の搖藍である。個人主義の支配は無智と非社會性とを意味する。……野蠻人は極端なる個人主義者である。何となれば彼等は二三のつまらぬ道具、各人の個人的課業以外の何物をも所有してゐらず且つ物々交換の欲望すら感じてゐないからである』と。(6)

以上述べし所に依て明かなるが如く、共産主義は原始人類の歴史的經驗ではなく、寧ろ經驗せらる可き將來の理想である。退歩の問題でなく、進歩の問題である。追憶す可き過去の事實ではなく、その實現を努力す可き未來の事實である。爰に於いてバブウフやマルクスとの相異は紛ふ方もない。原始の自然狀態は、懷古すべき共産の社會であつた。總てが調和と豐富の平和なる時代であつた。土地分割を繞る軋轢掠奪が突如是を攪亂した。土地分割に基く所有別に依て階級對立が發生した。爾來今日に到る迄社會の歴史は階級闘爭の歴史である。しかし此闘爭の進展して行く所、軈て社會革命となり共産主義は實現される。嘗て人類が既往に喪失した共産主義は巨大なる規模と豐富なる内容を伴ふて甦生するであらう。理想は過去にもあつた、そして將來にも竢つ可きものである。是がバブウフの抱懷する見解である。ルキス・モルガンを祖述して其國家論の構成の上に不可缺の鎖として役立てるマルクスの原始共産主義論も是と同巧異曲である。ブランキの見解の當否は姑く措くとするも、今彼等との軒輊は至極明瞭である。共産主義は、ブランキの言葉を借りれば、人類最初の時代の畸型的無秩序、混亂せる思想の合成體では無い。それは寧ろ社會科學の最後の言葉であり、將來の理想であり、結社の窮局目標である。(7)

（三）

既に人類の原始草莽の時代がブランキの思惟する如く共産主義ではなく、極端なる個人主義に在りとすれば、人類はかゝる時代より順次如何なる進化の階梯を經過して現在に及んだものであらうか。ブランキは地質學、社會學に依據しつゝ縷々として人類社會進化の道程を解明し、而して近代的搾取の原因たる貨幣の利息貸借、高利貸、換言すれば帝王『貨幣』の起源を尋ねる。

ブランキは人類の發展史を第一期石器時代、第二期石器時代後期、第三期青銅時代、鐵器時代に分類する。

（一）第一期、石器時代――此時代の人類は穴居生活を營む。穴居人は相互に全く孤立し、其日常の敵たる動物と殆んど同樣の生活を營み、是を住居糧食の爭奪を行ふ。そこには何等の社會性、理解、紐帶も存在しない。各人は唯、自己のために、而して萬人を敵とする。唯一の集團は家族である。

（二）第二期石器時代後期、青銅時代初期――此時代に入れば先づ種族に依る人類の接近が行は

れる。然し土地の領有も、農業も尚未だ起らない。二個の生活形態即ち遊牧民と狩獵民とが發生する。

（イ）遊牧民――此生活の特徴は、土地の共有、家長の支配、政府の最初形態たる教職政治が行はれ、牧民は一人若くは數名の首領に服從する。それは獨立の放棄てふ高價なる犧牲を支拂て買求められた最低度の結社である。それは奴隷狀態に近き一種の奉仕關係であつた。

（ロ）狩獵民――土地財産も牧群も存在しない。荒漠たる森野は共同狩獵區域であつて、各種族は狩獵區域の爭奪に血を流す。狩獵生活は鬪爭に充滿せる生活である。狩獵民は一人若くは多數の引率者に服從する。人々は長老及び有能者に服從する。

遊牧民の適例は高地アジヤのモンゴオル及びタタアル人であり、狩獵民の適例は南北アメリカの銅色土人及オオストラリヤの有色土人である。

（三）第三期青銅時代、鐵器時代――先づ農業が起り、次いで土地の私有が行はれる。此事實は一見個人主義への前進の樣に思はれるが、事實は其反對で、人間相互間に於ける結社形成への意識的接近であり且つ共産主義への道である。

此新しき文明の發展は多大の犧牲に依て購はれたものである。政治的權力並びに社會的權力が成長する。君主政治、貴族政治、族籍が現はれる。だが基調は依然として個人主義であり、家族の經濟的孤立である。各人は自己の總ての欲望に自ら備へる。未だ分業は存在しない。交換も、貨幣も、從て資本家的什一稅も、如何なる形態の物々交換も行はれない。此種生活の一模型は今日に至る迄、太洋群島に保存されてゐる。現代文明に導く此過渡的時代は極めて短いものとせられてゐる。(8)

青銅時代、鐵器時代過ぎて、間もなく大陸に商工業が起り、分業の發生を見るに到つた。分業は必然交換を惹起する。最初の交換形態は物々交換制である。然るに此物々交換制は消費が日常生活に絶對的に必要なる少數の財貨に限られてゐた時代には尚充分であつたが、被交換財貨の增加と共に破綻せざるを得ぬ。そこで斯る事態の要求に應じて、交換媒介物が必要とせらるゝに至つた。此所要に應ずるものが貨幣である。交換の媒介物たる事、それが貨幣固有の職能であり、其存在の理由である。貨幣の使命は交換媒介具であり否それに終始しなければならない。然るに本來交換媒介具たる貨幣の曲用が行はるに到つた。何ぞや、貨幣の利付貸借、高利貸の出現である。凡そ財貨交換の基礎は被交換物の等價に在る。一定額の貨幣を貸與して元本以外に利息を徵收する事は、より少きものに依て、より大なるものを獲得する所以で明かに竊盜であり罪惡である。それは啻に貨幣固有の使命を毒さざるのみならず、等價交換の原則を侵害するものである。ブランキは言つてゐる、

『貨幣は唯、一箇の媒介具にすぎない。此使命を超へてはならない。貨幣を利殖するために、これを其職能から脱せしむる事は交換の原則を撤廢するものであり、交換手段をば竊盜の道具に變ずる所以である。交換の兩行爲の間に於いて此種の濫用に依つて利息を奪取して相手方に損害を與ふる事は一個の社會的罪惡である』と。(9)

貨幣は單に人間に仕ふる交換媒介要具の地位より其自ら貨幣を生む事に依り、利息を竊取し、從つて人間を搾取し、支配する帝王の座に昇つた。帝王貨幣は最古最强の王朝を建設した。革命も、

征服も災變も此貨幣王朝を動搖さす事は出來なかつた。(10) 東より西へ、南より北へ、凡そ如何なる國民、如何なる領土が此帝王の支配を免れたであらうか。(11) 全世界は彼の支配に阿諛し、扈從し、叩頭する。かくして『資本家的搾取と共憂鬱なる姉妹たる不平等と貧困とが發生する。』(12) 爾來貨幣に依て搾取する搾取階級と貨幣に依て搾取される被搾取階級の抗爭の歴史が展開せらるゝこととなつた。

先づ古代羅馬に溯る。『帝王貨幣は此羅馬共和國に君臨した。』(13) 貨幣の所有者貴族階級のパトリチエと債務者、平民階級のプレッブスとの抗爭は搾取被搾取を繞つて爰に逸早く展開せらるゝ。ブランキは謂つてゐる、

『ロオマの歴史は資本對勞働の闘爭の長い物語に外ならぬ。軋轢及戰爭、――總ては此闘爭に由來する。執政官の任命及沒落、民官の制定は謀叛鎮定の常用手段たる征服と同樣に此闘爭のエピソオドである』と。(14) 更に謂ふ、

『西部の勝利者パトリチエは高利貸であり、劍(武力)とゼステルッ(貨幣名)に依て同時に支配者である。債務に壓殺されたプレッブスは肉體的拘禁てふ强制手段に依て落札者に賣られる。支拂ふ事能はざるものは戰敗者と同樣に奴隷となる。五百年を通じてパトリチエとプロレタリヤは政治的及社會的問題のために闘爭した。これは又ヨオロッパ勞働者の狀態であつた』と。(15)

而して此闘爭は言ふ迄も無く常にプレッブスの悲慘なる敗北に終つた。謂へらく、

『パトリチエは僧侶、軍人、金利生活者、財政家であつた。總ゆる地位は彼等に屬する。壓ゝプレビエルが其物質的壓迫者に反抗して蹶起することがあつても、間もなく彼は彼の良心の獨裁者の膝下に屈服する』と。(16)

古代を過ぎて中世に這入れば、縱令闘爭の形態は變化しても其内容に於いては些の變化を見る事が無い。基督教とゲルマン民族の遷移に依て成立した中世封建社會に於いては農奴が領主に對峙した。頑强なる農奴は單身戰ふ事の不可能なるを悟つて、多數糾合して、領主の饗宴を攪亂した。ブランキはバゴオド、ジャアクの一揆や獨逸の農民戰爭を想起する。彼は謂つてゐる、『爭論が暴力の問題となるや否や、多數の者が口を切る、そしてジャアクの一揆は多數であつた』と。(17)

封建社會の滅亡から發生した現代ブルジョア社會は階級對立を揚棄したのではない。それはたゞ新しい階級、新しい壓迫條件、新しい闘爭形態を古いものと替へただけである。(18) しかしそれ丈近世社會の階級性は鮮明となり、階級對立は深刻となり、闘爭は益〻尖鋭となるに至つた。烱眼なるブランキは鋭く這間の消息を剔抉して吾人に提示する。峻烈なる筆端バブウフを凌駕する事數倍、マルクスのそれに比するとも些の遜色を見ない。ブランキ謂へらく、

『現代社會秩序の組織はかうである、資本は命令して、服從しない。資本が最早統治し得ざるに到れば壓迫に着手する。資本に取つて、自由とは絶對的權利を意味する。資本の勞働に對する關係は主人の奴隷に於ける關係に外ならない』。(19) 更に謂ふ、

『世界は彼等の意の儘に搾取せられ且つ納稅義務を負ふ素材として、權力に屬する。弱者の規則的職務、彼の天命は强者の飼料となる事である。社會は弱肉嗜食の組織に外ならない。强者の神聖な

る權利に對して弱者に附與せられた總ての保護、搾取に對する總ての保證は、社會的原理、自由、自然的秩序、更に人間本質の毀損である。それは神に對する、人間本質に對する反抗であり、自然法顚覆の企畫である』と。(20)

又謂ふ『人間社會を餘計物のために犧牲にし、そしてそれから必要品を奪ふ事は慥かに資本の罪惡である。……怠惰者は勞働する事なく費消する。プロレタリヤは費消する事無くして勞働する。一方に於いては享樂の過剩、地方に於いては缺乏の過剩が存する。……社會は富者と貧者、强者と弱者、搾取者と被搾取者から組織される。人は是等二階級の何れかを選ばなければならない。……不平等の原因は高利貸である。……富者の欲望を調達するは實に勞働者の運命である』(12)

かく煩を勞はず多數の引用を試みたのは、一つは筆者が好む所に投じてブランキを紊りに附會し獨斷する所以に非ざる事を示すと共に、他方ブランキの發言が決して偶然の落想でなく其主著「社會批判」Critique sociale, 1885を一貫せる根本觀念であることを示すためである。從て前記引用類似の言句は殆んど同著の隨所に散在してゐるが前記の片鱗に依て其全幅を推すことは困難ではないと思ふ。『社會批判』は遺稿集ともいふ可きもので彼の見解を覗ふ可き殆んど唯一の系統的資料であるが、然し彼の階級闘爭論は決して晩年を竢つて成果した思想ではなく、青年時代より一貫して懷抱せる宿想である。一八三二年ノオトルダム陰謀事件に連坐した彼は同年一月公判廷での陳述で次の如く言つてゐる。時に彼正に二十七年。謂へらく、

『然りこれ富者と貧者との闘爭である。富者は侵略者なるが故に闘爭を好む。唯、彼等は貧者の反抗を罪惡と思惟する。……人々はプロレタリヤを財産に飛びかゝるべく斷へず身仕度せる盜賊であると非難することを止めぬ。何故であるか。蓋しプロレタリヤが特權者に苛歛誅求せらるゝを歎息せるが故である。プロレタリヤの汗苦で豐かに生活せる特權者――彼等こそは貧慾なる貧民の掠奪に嚇かされつゝある法律的所有者である。……然らば幾多の咒詛と刑罰とに値する盜賊とは何者であるか。國庫に十五億の金即ち特權者と略〻同額を支拂へる三千萬の佛蘭西人これである。而も全社會が其の力で保護してゐる所有者とは盜賊に依て支拂はれた數億金を樂々と食盡してゐる二三十萬の有閑者である。これは封建諸侯と彼等のため大道で掠奪された商人との闘爭の新形態と思はれる』と。(22)

次いで一八三四年三月雜誌 "Libérateur" の中で現代社會構成の峻烈なる批評を試みてゐるがその中で人民は自由でなく、勞働要具を有する人々に支配されなければならぬといひ又市民を有産者の拘束の下に置く土地及資本の世襲的讓渡に反對して次の如く言つてゐる、

『奴隷狀態とは單に他人の物若くは封地の農奴たる事に在るのではない。勞働要具を奪はれ、かゝる不可缺な要具を占有する特權階級の意の儘に支配さるゝ所の人は決して自由ではない。大衆を奴隷たらしむる所のものはかゝる占有であつて、決してあれやこれやの政治的制度ではない。土地及資本の世襲的讓渡は市民を有産者の拘束の下に置く。彼等は自己の主人を選ぶ以外の自由を持たぬ。そこから疑もなく「富者は貧者を働かしむる」といふ嘲弄的文句が生れる。それは實際栽培者が黑人を勞働させるのと殆んど同樣である。唯、異る所は勞働者は奴隷の如く管理者にとつて

資本でないといふ事である。彼の死は何等の損失ではない。常に彼を補充すべき競爭がある。而も此僅少なる配分たる賃銀は、縱令死を妨ぐるにやつと足りる位のものであるが、それにも不拘、搾取せられた肉を急速に繁殖せしむる効果を有する。貧者の子供は富者の子供に仕ふるため、際限なく世に送り出される。かくして現代社會の成果を構成する富裕と貧困、享樂と苦痛、との此二重の平行せる相續は代々繼續されてゆく。

其自身に於いて實を結ばぬ資本は唯、勞働に依てのみ果實する。勞働の道具と果實とは勞働者に屬せず、有閑階級に屬する。馬蜂が蜜蜂の蜜を甜め盡す。これが征服に基く現代社會狀態であつて、此征服は國民を征服者と被征服者とに別つ。かゝる組織の論理的歸結は奴隷狀態である。特權階級は土地所有權より、土地を豐かならしめる人間てふ家畜をも所有する權利を結論するに至つた。(23)

茲に現代ブルジョワ社會の機構は彼の俎上に縱横に解剖されて餘す所が無い。時に一八三十有餘年、バブウフ逝いて三十有餘年、後年の天才兒マルクス既に世にあれど、未だ海のものとも、山のものとも見へざる年齡僅かに十有幾歲。この時に既にこの卓見あり。洞察の凡ならざるや言ふを竢たない。吾人は曩にブランキの階級闘爭論が初期よりの一貫せる持論であるといつた。今讀者は此事を了解し得ると思ふ。

（四）

既に社會が階級的構成であれば、支配階級は常に豫期せらるゝ被搾取階級の反抗を擊退し、且つ絶滅し、以て自己の地歩を防衛し、その支配的欲望を遂行し、かくて永久に現行社會の保持に努力するであらうことは自然の數である。かゝる支配階級の關心は幾多の防衛、支配機關の設定となつて現はれる。政府、議會、法律、宗教、軍隊、課稅等の諸制度何れも搾取階級の支配的機關と化する。是等の機關は常に支配階級の手で超階級的粉飾を施されて、被支配階級の面前に提示せられんとするが、それは支配階級の常套手段であつて、實を洗へば何れも彼等の走狗たらざるものはない。ブランキはかくて是等機關の階級性を鋭く衝いてゐる。階級的制度觀ともいふべきものである。法律とは何か。何人が制定したか。そして何のために。ブランキ謂へらく、法律とは常に强者の意思の表現である。その制定權は特權階級の占有である。貧者を抑壓搾取する公認的手段である。曰く、

『抑壓は總ての時代を通じて强者の意思たる法律を通じて表明される。此法律は社會をば常に所有の原則、換言すれば勞働の隷屬の上に組織する。多數は勞働する、而も少數のために勞働しなければならない。それは一般に人類の當初より總ての社會組織の方式である』と。(24) 又曰く、

『歷史は此激甚なる闘爭の長い物語に外ならない。歷史は所有の流血的勝利、有產者の殘忍なる法律、無慈悲なる支配を記錄した。有產者の防衛手段は勞働者の本能的防禦に對する苛酷なる刑罰以外になかつた』と。(25) 又一八三二年の法廷の陳述の中で『より巨額の金額は特權階級の手で、商工行爲を支配する法律に依て直接に大衆に賦課せらるゝ。そして特權階級はこの法律の獨占的制定權を握る』と。(26)

政府とは何であるか。ブランキは先づ代議政體の本體を暴露する。曰く『Paul Courier は代議政體てふ鍋、即ち或る有閑者の函に不斷に流れ込む數百萬の金を吸上るために人民といふ素材を壓搾

するこの吸上並に壓搾ポンプを不朽のものと考へた。これは二千五百萬の農民と五百萬の勞働者とを一人づゝ粉碎して彼等の血液の最も純潔なる血を搾取して、これを特權階級の血管の中に移入する殘忍極まる機械である』と。(27)　又他の個所で謂ふ『かゝる多數の租稅は富者を恒に庇ひ。そして專ら貧者を壓へる樣な工合に分配されてゐる。……これが內閣の聰明な人々が社會組織の傑作として、開闢以來種々なる行政機關の中で最も立派で且つ完璧のものの姿として吾々に與ふる政府である。これ彼等が統治の方面に於ける人類完成物の極地として矜る所の政府である』と。(28)

敎會と軍隊とは彼に依れば專制政治の二つの道具である。敎會は超自然物を保存し、普及する事に依て勞働階級を陷穽に陷らしめる。軍隊は平時はプロレタリヤを束縛の下に置き戰時には戰爭に依て彼等の氣分轉換を行はしむる。即ち戰爭は彼等をば戰場で蒼白と化するまで放血せしむる事に依て其激情を鎭靜せしむるに役立つ。『吾人は唯、外科醫の殘忍なる傍若無人と患者の魯鈍の何れを最も驚歎すべきかを知れるのみである。』(29)

ブランキは又植民地の征略が兇暴なる利慾の發露であることを既に理解してはゐたが、しかし歐洲に於ける幾多の大戰の經濟的根據を未だ認めてはゐなかつた樣に思はれる。

（五）

同じく階級闘爭の事實に着目しても、是を以て、呪詛すべく嫌惡すべき事實、不自然、變則の社會現象なりとし、是を調和妥協せしむる事が社會思想家の刻下の急務であると思惟し、かゝる現象の中に社會進化の歷史的法則を發見する事が出來なかつた。空想主義者の名の下に一括せらるゝサン・シモン、フウリエ、オオエン、コンシデランの場合はこれである。闘爭を止めしめよ、兩階級を妥協せしめよ、利害の對立を調和せしめよ。彼等の主張は何時でもかうであつた。彼等の見解は客觀的認識ではなくして倫理的判斷であつた。ブランキは此點に於いて是等の人々と全く其選を異にする。バブウフに倣つて、而も彼より一層明白に、且つ斷乎として闘爭階級の妥協、吻合、協調を說く人々の見解を嗤笑すべき謬論として一蹴する。蓋し、彼に依れば階級闘爭は社會成長の上に否應なく經過すべくき道程であり且つ又將來社會實現の產婆を意味するものだからである。それは倫理的判斷の彼岸に在るべきものである。ブランキは謂つてゐる、

『……しかしかゝる暴逆なる壓制は自己の危險を持つ、怨恨、反亂これである。かゝる危險を追拂ふため、人々はカインとアベルを和解させやうとする。人々は勞働要具としての資本の必要性から利益の共同、從て資本家と勞働者との連帶を引き出さうと努める。かゝる友愛案の上に色々な文句が何と巧みに縫取られてゐることよ。羊の毛を剪るのは唯、羊の健康のためにすぎない。感謝すべきである。現代の醫者はうまい事を言つて人を欺す術を心得てゐる。これ等の陳腐なる說敎はお人好を捉へるかもしらぬ、だが、その手にかゝる者は少ない。寄食者と其犧牲者との所謂現代社會は日々明るみに出される。事實が雄辯である。事實は所得と勞銀との生死の決闘を證明する』と。(30)

階級闘爭解決の道は當事者間の吻合妥協ではなく、この闘爭をしてその自然的軌道を急がしむる事である。換言すれば、その赴く所まで自らの運動を展開せしむる事である。蓋し支配階級の搾取は益〻露骨となり、被抑壓階級の苦惱は愈〻深刻化して遂に堪へ難きものとなる。窮地に追ひつめら

れた被搾取隋級は遂に激昂して生死の反抗を挑む。玆に革命が勃發する。ブランキは階級闘爭の極度の尖鋭化が被支配階級に許されたる最後の血路、――革命にまで導くことを主張してゐる。此激化せる階級闘爭の結果は革命の到來となり、プロレタリヤの勝利となる。舊權力は倒壞して人類は將來社會への門戸に立つ。建設の時代は始まる。ブランキ謂へらく、

『余は將來、勞働者が彼等の失はれたる勞働のために、彼等の危險に曝されたる生存のために、失業、貧窮、飢餓のために、革命思想を抱くに至ることを最早怪まぬ。革命――、それは怨に燃ゆる彼等の心情の唯一の慰藉であり、彼等の道德的苦惱の唯一の休息であり、地に垂れた彼等の額を揚げしむる極めて短き瞬間である。あゝ余は今日、それを知る。問題は勝利と權力の時期、長い雌伏後の勝ち誇る時期である』と。(31)

かくて階級闘爭は終末を告げる。革命成就の第一着歩はプロレタリヤの革命的獨裁である。此過渡期の完了と共に共產社會は呱々の聲を擧げる。階級闘爭は社會進化の推進力である。

（六）

階級の本質とは如何。ブランキは、どこにもこの問題を別段に取扱つてゐない。しかし彼が階級別の標準を搾取、被搾取に置いてゐる事は慥かである。しかし、この搾取とはマルクスに於けるが如く勞働產物としての餘剩價値の竊取を意味するものでなく、貨幣の貸與に依る利息の竊取に在ると見るべきである。固よりブランキはプロレタリヤなる語を使用した最初の人ではない。しかし明確なる意義を以て此語を使用した一先蹤である、

而も彼に依る此概念の認識は、未だ、これが歐洲社會の常套語と化するに到らざりし時代の事に屬する。即ち一八三二年ノオトルダム陰謀訟訴事件公判廷に於いて『汝の職業は如何』との裁判長の訊問に答へて、『余の職業はプロレタリヤであると』いひ、『プロレタリヤは自己の勞働で生活し、而して政權を奪はれてゐる三千萬のフランス人の職業である』(32) と諷刺的意見を吐露してゐる。プロレタリヤの意義を社會學的に分析したロオレッ・シュタインの名著『現代フランス社會主義及共產主義』の出版は一八四二年『ヘーゲル法律哲學批判序論』に於いてマルクスが初めてプロレタリヤの歴史的任務を說いたのは一八四三年。何れもブランキに後れる事十有餘年、固より彼等の研究に對しブランキの粗雜未熟到底同日の談ではないが、しかしプロレタリヤなる觀念に重要性を與へた彼が先陣の功は逸することは出來ぬ。最後に、ブランキはプロレタリヤの解放を說き乍ら、これを彼等自身の歴史的任務と考へなかつた。この重大なる任務を落魄ブルジョワジイに與へてゐる。蓋しプロレタリヤは無知、卑賤にして新社會建設の文化的任務に到底堪へ得るものでないと思惟したからである。此點プロレタリヤの解放はプロレタリヤ自身に竢たざるべからざるものとしたマルクスと根本的に相異する所であり又ブランキズムの一異色としてあぐべき所であり更に又バブウフに忠實なる點でもある。尙此部分は後節に到つて再び細論することとする。

(1) Auguste Blanqui,—Kritik der Gesellschaft.: Gesammelte nationalökonomische Schriften. Autorisirte deutsche Übersetzung. Leipzig, 1886 Bd. II. s. 39.

(2) Blanqui, a. a. O., s. 37.

(3) Blanqui, a. a. O., s. 39.

（4）Blanqui, a. a. O., s. 39
（5）Blanqui, a. a. O., s. 39.
（6）Blanqui, a. a. O., s. 36, 39.
（7）Blanqui, a. a. O., s. 35. 36.
（8）Blanqui, a. a. O., s. 41-42.
（9）Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 103.
（10）Blanqui, a. a. O., Bd. II. s. 43.
（11）Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 33.
（12）Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 31.
（13）Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 34.
（14）Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 34.
（15）Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 34.
（16）Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 34.
（17）Maurice Dommanget,—Blanqui, Paris, 1924 p. 55
（18）マルクス「共產黨宣言」大田黑・早川共譯七九頁
（19）Blanqui, a. a. O., Bd II. s. 129.
（20）Blanqui, a. a. O., Bd. II. s, 141-142.
（21）Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 51. Bd. II. s. 22. Bd. I. s. 61 2.
（22）Alexandre Zévaès,—Auguste Blanqui, patriote et socialiste français. Paris, 1920. p. 22.
（23）Gustave Geffroy—L'Enfermé. 1926, Éd. revue et augmentée. Tome I. p. 69-70.
（24）Blanqui, a. a. O, Bd. I. 161-162.
（25）Blanqui, a. a. O., s. Bd. I. s. 162.
（26）Dommanget, ibid., p. 48.
（27）Zévaès, ibid., p. 22.
（28）Dommanget, ibitd., p. 48-49.
（29）Dommanget, ibid., p. 52-53.
（30）Blanqui, a. a. O., Bd. II. s. 66-67.
（31）Blanqui, a. a. O., Bd. II. S. 169.
（32）Zévaès, ibid., p. 21.

三、プロレタリヤ獨裁説

A、獨裁の樹立

（イ）政權の略取

一八六七年十月、「同盟罷業と協同組合」と題する一斷片の末尾を結んでブランキはかう言つてゐる、

『國民大衆は政治的變革を行ふために全力を傾到しなければならぬ。社會的變革並に正義に基く生產物の分配を惹起し得るものは唯、此政治的變革あるのみである』と。（1）

此意味は、總て社會變革は何よりも先づ政治的變革を前提としなければならぬ。前者は後者無くして存在し能はぬ。政治的權力を舊狀に放置して、社會革命を說くことは本末顚倒である。それ故

に共產主義革命の第一着歩は政權の轉位、換言すればブルジョワジイの『憲兵』の役割を力めてゐる國家權力を略取してプロレタリヤの手中に收めることでなくてはならぬ。かくして初めて現行社會の經濟的基礎を覆滅して新社會建設の域に這入ることが出來るといふ事である。茲に階級闘爭は必然政治的闘爭でなければならぬの含蓄がある。プロレタリヤ解放の物質的條件よりも寧ろ政權の神秘的創造力の信仰、社會進化に對する政治的進化の優越性の確信――要するに社會進化に於ける革命的意思の强調、これがバブウフ主義に於けると同樣にブランキの思想が所謂ブランキズムとして異彩を放てる特徴である。

此の點に於いてブランキは一切の政治的行動、就中一切の革命的行動を排斥するサン・シモン及びフウリエと區別せられ又政治的革命を社會的革命に從屬せしむるプルウドンと趣を殊にする。又ルイ・ブランとも根本的に異る。ルイ・ブランに依れば、政治的改革なしには、社會的改革はない。後者が目的、前者は手段である。一見ブランキに類似する。しかしルイ・ブランの是認する政治革命とは純乎たる、形式丈のものにすぎぬ。何となればそれは國家機關をば依然としてブルジョワジイの手に存置せんとするものだからである。(2)

一八七九年十一月末の一書簡の中でブランキは此問題に言及して次の如く述べてゐる、

『社會問題は、政治問題の最も斷乎たる且つ最も確定的なる解決の後、初めて眞面目に論議せられ且つ實際に移されるであらう。これと異つた行動をすることは尋常の反對を行くことである。人は既に一度これを試みた。社會問題は二十年間姿を消した。だが又直ぐに而も大いなる明瞭さを以て、完全にして且つ極めて詳細なる、少くとも五十の綱領の中に提起せられた。總ては行政權に依て惹起された苦惱の中に消滅してしまつた。宜しく自由となるためには何よりも先づ此行政權を顚覆すべきであつたであらう。吾等は此のすぎ去つた流血の教訓を利用せねばならぬ。同樣の過誤を繰返すまい』と。(3)

現行權力を其儘に放置して社會問題を解決することは縱令一時的には表面を糊塗し得ても結局無駄骨折である。根本的解決は永久に望めない。要は現行政權の顚覆でなければならぬ。

社會生活に於ける國權重要視の觀念は既にブランキ初期以來の思想である。一八三二年の公判廷の陳述の中で彼は謂てゐる、

『吾々は三千五百萬のフランス人が自己の政治形態を選擇し、普通選擧に依て、法律を制定すべき使命を有する代表者を任命すべき事を要求する。此の改革にして成就せらるれば、富者のために貧困者を剝奪せる租稅は忽ち廢止せられ、これと反對の基礎の上に建てられた他の制度がこれに代るであらう』と。(4)

一八六七年八月『一講演の草稿』と題する論文の中では、傍らプルウドン主義を論難し乍ら、隨所に國家權力の社會生活に於る優越性を說いてゐる。彼は國家權力を閑却してプロレタリヤを解放せんと欲する理論を評して謂ふ、

『經驗に逆らひ且つ分別なく經濟學と稱する所謂科學に依て樹立された此新學說、國民の全活動を政府の埒外に置き且これを全く政府に無關係のものと主張する此珍妙なる學說、これは果して何物

であるか。かゝる學説は經驗と歴史とに對する最も大膽なる否認である、從つて破廉恥である――否それ以上のもの即ち非倫、罪惡でもある』と。(5)

全世紀を通じて歴史の教へる所は正に是と反對である。國民の生殺與奪の權を握れるものは實に政府である。政府の問題は死活の問題である、謂へらく

『國民を滅し又は救ふものは政府である。國民はこれに依て生きもし滅びもする。善惡總ては政府に出發する。政府は、主として一方の顔を立てやうとする。何故に他方に對して責任を負ふべきではないか。政府は總てに對し、無知に對し、窮乏に對し、思想及道德の衰頽に對し、物質的、精神的並に道德的衰微及沒落に對し責任を有する。國民のパンは其名譽と丁度同じく彼に依存する。國民が自己の苦惱を彼に負しむる事は全く正しい。……劣惡なる政府に依て苦しんでゐる國民が今若し此政府を變更する意思若くは力を最早有せざるに到れば、その國民は、死苦に陷りそして次第に墓場に滑り行く。かく政府の問題は生死の問題である。この眞理を大衆の精神の中で打碎き、彼等の物質的健在が國家に依存するものでないと彼等に説得することを程、危險なる事はないであらう』(6)

國家權力を離れて行動することは手足を縛せられて行動することである。これをプロレタリヤに説くことは欺瞞である。しかし『此欺瞞は永くは續かぬだらう。プロレタリヤは手足を縛られ、目隱しをされては前進する事が出來ない事を看取するであらう』。(7) それ故にプロレタリヤは自己の解放のためには、先づ政治的に行動すべきである。恒に國家權力を目標としなければならぬ。政權の獲得に依て、國家は『貧困者に對する富者の憲兵』の地位から變じて、富者に對する貧者の憲兵となるであらう。國家の征服、政權の略取、これがブランキ的革命の第一行動である。ブランキ自ら言ふ『革命それ自身である所の共産主義はユウトピヤの前轍を警戒しなければならぬ。それは政治から絶緣してはならぬ。……政治は彼の僕婢以上のものである』と。(8)

（ロ）　國權略取の方法

――暴動戰術

共産主義革命の直次の目的が國權の略取であることは既に述べた通りであるが、然らば此國權略取なる手續は如何なる方法に依て行はるるや、デモクラシイに依る政權の平和的授受に依るか、將又暴力に依る强制的奪取に依るか、ブランキの擇ぶものは前者にあらずして後者である。國權の獲得を暴動戰術なる方法に竢つこと、――これブランキの眞骨頂であり、世人の目して特にブランキズムとなす所の革命的方法である。

此の點に於いて彼は社會變革の平和的可能性を説く十九世紀前半多數の社會主義者殊に大空想主義者と異なる。ロバアト・オオエンはプロレタリヤの解放を實現するため維納會議に會集せる歐洲列强の政治家に訴へた。フウリエはファランジュの理想鄕を打建んとして、其建設に要する資金を提供する資本家溫情家の來訪を日々鶴首して待つた。サン・シモンは暴力を排して、産業社會の樹立を討議、論證、説服等の平和手段に期待した。

又ルイ・ブランはブルジョワジイとプロレタリヤの協力に總ての希望を置き、其著「十年史」の末尾でプロレタリヤにそのブルジョワジイの後見人を以て自任せんことを説き而して社會的變革の純乎

たる法律的、平和的性質を主張してゐる。初めバブウフに歸依したカベエも後年に於いては隱謀を斥け、忍耐を説き、革命的行動を排斥してゐる。(9)

再び還つてブランキの暴動戰術について述べやう。

先づ彼の暴動戰術の特色は暴動を敢行する革命軍が革命に一身を捧ぐる果敢不屈の少數黨から成れる事である。マルクスは、プロレタリヤ運動は莫大な多數者のための、莫大な多數者の自主的運動であるといつてゐる(10)。ブランキに於いては多數者のための少數者の運動である。此少數の革命軍は命令一下、一齊に蹶起して武力を以て政權を奪取して革命完成の建設事業に着手する。ブランキはかゝる革命のため秘密裡に、指揮官の精選、兵士の訓練、彈藥武器の秘密製造を行つた。實行の氣力なき口舌の徒はブランキの最も忌む所である。

かゝる少數の革命軍は然らば何處より徵募せらるゝか。それはプロレタリヤとブルジョワジイから求められる。しかし勿論總てのプロレタリヤではない。巴里の急進的開明的なプロレタリヤである。ブルジョワジイとは勿論總てのブルジョワジイでなく、既に自階級の傳統を信奉する意思と能力とを喪失し而もプロレタリヤ解放に興味を有する一部のブルジョワジイである。ブランキは斯る一部のブルジョワジイを落魄者 déclassés と呼んでゐる。而して革命軍の指揮官、幹部等の所謂革命の原動力、指導的地位に該當すべき上級構成分子はこの「落魄者」であり、其兵卒ともいふべき下級構成分子はパリの急進的プロレタリヤである。其理由は簡單である、プロレタリヤが比較的無知なるに反し落魄者は思想及教育の人であるからである(11)。革命軍の中核を成すものはかゝる「落魄者」の一團である。

ブランキは謂ふ、

『ブルジョワジイは、氣力あり、熱情的な溶解し難き一群たる少數の精英を含む。それは革命の眞髓であり、精靈であり、生命である。それは大衆を鼓舞煽動する改革思想が不斷に流れ出す白熱的根源である。プロレタリヤの旗を樹てたのは誰であるか。敗北の後プロレタリヤを糾合したのは誰であるか。平等教義の普及者、傳道者は誰であるか。ブルジョワジイと戰ふべくプロレタリヤを導くものは誰であるか。ブルジョワジイ自身である。……その旗幟にかゝぐる標語は何であるか。デモクラシイか。否、プロレタリヤ。何故といふに、指揮官は勞働者ではないが兵卒は勞働者だからである』と。(12)

又他の個所で言ふ、

『數千の精英は極度の窮乏に沈落してゐる。彼等は資本の脅威である。進歩の見へざる代表者である是等の落魄者は今日大衆を支持し、彼等が無力に陷ることを妨ぐる祕密の酵母である。明日、彼等は革命の豫備軍となるであらう』と。(13)

實際ブランキ黨は主としてブルジョワジイ、パリの諸學校の急進學生、青年辯護士、新聞記者から成つてゐた。領袖の一人 Tridon は無名の新聞記者、他の一人 Ernest Granger は小資產家、コムミュン時代知名のブランキ主義者 Rigault 及び Ferré は共に學生であつた。是等の多數のブルジョワ分子に數百の巴里の急進的プロレタリヤが加つてゐるのであつた。(14)是等の分子が何れも峻嚴なる宣

誓の後始めて加盟を許可せられた事は祕密結社「民友協會」「家族協會」「季節協會」の場合に徵して明かである(15)。彼等の行動は一切秘密裡に潛行的に行はれ、常に擧兵の好機を窺ひ些細なる口實を捉へて街頭に進出し、合圖と共に一齊に蜂起して、首領の指令に一絲亂れざる行動を採り、此暴動を革命にまで擴大するに力むる。市街戰、暗殺は彼等の常套手段である。

かゝるブランキの暴動戰術は勿論決して彼自身の獨創に成れるものではない。其根源はドマンゼが指摘するやうに、先づ主觀的にはバブウフ主義であり、次で客觀的には歷史的時期即ち七月王朝の時代である(16)。

バブウフ主義は先づ一八二八年に出版されたブオナロッチの「バブウフの所謂平等の陰謀」なる著書に依て思想的にフランスに齎らされ、次いで一八三〇年ブオナロッチのフランス再來と共に實際的に移植された。平等者陰謀の樞機に參畫したブオナロッチはこの陰謀の暴動戰術を親しく傳授した。ブロンキはこれを體得した。ブランキの方法がジャコバニズムの色彩濃厚なのはこれがためである。

七月王朝の時代はマルクスの所謂「プロレタリヤ運動の幼稚時代」であり、「宗派的運動」の時代であり又「プロレタリヤとブルジョワジイとの闘爭がまだ十分發達しない初期の時代」に屬する。此時代は總ゆる民主的、共和的運動に對する政府の彈壓、官憲の追及、法律の取締峻嚴を極めた時代であつた。これがため是等の運動は孰れも秘密結社の殼に閉ぢ込められてしまつた。秘密結社の運動方法は何れも潛行的、陰謀的であつた。かゝる傾向は政府の彈壓が愈〻苛酷となるに比例して益〻增大し其反撥力を强め其狂暴性を助長した。かゝる狀勢に在つて暴動戰術は秘密結社に許されたる唯一の革命的情熱の捌口であつた。暴動戰術は正しく時代の子であつたのである。

（一）革命的獨裁の思想

革命の窮極的目標は共產主義の實現にある。今、政權が暴動戰術に依て首尾よく革命軍の手に奪取せられたと假定する。然らば此政權の發動に依て共產主義は、今日から明朝へ、一擧に實現せらるゝのであるか。ブランキは決してかゝる革命の神秘を信じない。革命的意思を信奉すること厚い彼ではあるが、他面又進化の理法に疎くはない。彼は革命を一進化の行詰りであり、同時に又新なる進化の端緒であると思考してゐた。屢〻猪突的革命家の典型と看做されてゐるブランキは、事實一個の現實主義者であつた。ブランキは勿論唯物史觀は有たぬ、だが、このため無雜作に彼を空想主義者の類に突き入れることは稍〻正鵠を欠ぐ。進化の理法は彼の重要視する所である。

ブランキは謂つてゐる、

『凡そ人間に於いても、自然に於いても何一つ俄拵へといふものはない。外見性急に見ゆる革命でさへ、實は蛹の分娩に外ならぬ。革命は打毀された被殼の下に徐々として成長してゐたのである』と(17)。

共產社會の到來も矢張かゝる進化の理法に從ふものである。共產主義革命の第一着步は政權の略取でなければならぬ。だが此政權の運用で魔法の如く明朝にも新裝をこらした新社會が到來するやうに思ふのは愚にもつかぬ空想である。革命はたゞ將來社會への口火を切つた事に外ならぬ。

ブランキ所謂らく、

『總ての有機體には生存條件がある。是等の條件を外にしては有機體は生存出來ない。共産主義は人工的に製造出來るものではない。蓋し、そは俄作りの出來ない教育の結果だからである』(18)：：又曰く『單純な宙返りで新社會が獨り立ちして來ると想像するのは愚千萬の事ではないか。否、人間に於いても、又自然に於いても事件はそんな風に行はれるものではない』と。(19)

更に謂ふ、

『革命の翌日、舞臺は急轉する。だがそれは急激なる變革が行はれたためではない。人も物も前日と同じである、唯、希望と恐怖が其地位を變へた丈である。鎖は落ちた。國民は自由となる。巨大なる地平線がその眼前に開かれる』と。(20)

これに依て見れば政權の略取より共産社會の發生に至る迄には一定の時間的間隔の存在せざる可からざる事は明かである。これを假りに過渡期と呼んで置く。過渡期は共産社會現出の準備時代である。然らば、此過渡期に於いて、戰ひとられた政權は如何に運用せらるゝか、如何なる形式を通じて發動するか。デモクラシイに依るか、將又獨裁政治に依るか。ブランキが選ぶ所のものは後者である。

ブランキに於けるプロレタリヤ獨裁の觀念は決して彼の後年の着想ではない。少くとも一八三六年に此觀念の萠芽といふべきものを見受ける。これを證明するものは當時の秘密結社「四季協會」入會の際に於ける問答である。曰く、

『革命直後、人民は自ら自己を支配し得るか。社會狀態は腐敗せるが故に、健全なる狀態に移らしむるためには英雄的救濟策が必要である。人民は、暫時革命的權力を必要とするであらう。王政並に總ゆる貴族政治を絶滅して、これに代ふるに共和政治、即ち平等政府を置かねばならぬ。だが、かゝる政府に移るためには人民をして、かゝる法律を行ひ得る狀態に導く革命的權力を用ひなければならぬ』と。(21)

これは『四季協會』の首領たるブランキの見解であると看做して差閊ないと思ふ。爾來ブランキは終始かゝる革命的獨裁の思想を支持し、年と共に益〻其信念を固うしたのである。

然らばブランキはプロレタリヤ獨裁の觀念を何處より得たか。思想的には(一)ニッコロ・マキヤヴェルリ、(二)バブウフであり、實際的にはフランス大革命の記憶並に彼自ら參加した諸革命の經驗である。

ブランキは事實マキヤヴェルリを研究し其の「王侯論」Traité du Prince を味讀したと言はれてゐる。マキアヴェルリは謂つてゐる、變化は常に他の物を建設するための希望の石を與へる。過渡期が必要である。國家を占領したならば、强大なる權力を構成して、直ちに、斷乎として行動しなければならない。仕事は難澁である。何となれば舊制度の擁護者は不俱載天の敵となり、そして情報を得んとして集合せる人々は、爲さる可き實驗が殘つてゐるので、半信半疑でゐるからである。一方に於ては攻擊の感情、他方では防衛の微溫行爲がここから生れる。加之、人民の性質は可動的である。吾人は、國民を決心させる事は容易であるが、この決心を固持せしむるのは困難である事を常

に記憶せねばならないと。このマキヤヴェルリの言葉はブランキの深く感銘する所であつた。

マキアヴェルリに敎へられたものは獨り、ブランキのみではない。バブウフも亦そうである。バブウフ逮捕の際に押收された文書の中にマキアヴェルリの著作 "La premier décade de Tite-Leive" に關する感想錄が發見された。ブランキ、バブウフが等しく獨裁觀念をマキアヴェルリに得てゐることは興味甚だ深い。(22)

しかしブランキの直接思想的根源は何はともあれバブウフの敎義である。バブウフ主義はブオナロッチの手で親しくフランスに移植された。ブランキがバブウフの敎義に親炙したのは專らブオナロッチの賜物である。

更に獨裁觀念を敎へた實際的原因は、先づフランス革命の記憶である。大革命の種々の時期を通じて、國民の統一を實現し革命的活動及民主的精神を極度に發揮したものは國民公會であつた。一七九三年頃マラア、エベエル、ショオメット等は國民公會に據て國民全體に對して一種の獨裁を行つた。一八三〇年及其後年の人々は、かゝる歷史を能く記憶してゐたのである。ブランキも亦其一人である。『寬容では革命は出來ぬ。狂暴なる嚴格を以てすべきである。中途半端な革命を行ふものは、自家の墓穴を掘つてゐるにすぎない』(23) といつたサン・ジュストの言葉はブランキを喜ばせたものである。

フランス大革命に次いで、彼自ら參加した革命就中一八四八年の革命は彼に頗る貴重なる經驗を與へたものであつた。これは彼の獨裁觀念の原因といふよりも寧ろ當時既に懷抱せし革命的獨裁の重要性を如實に痛感せしめたものであらう。何故といふに獨裁觀念は一八三六年以來既に彼の抱懷せるものであつたからである。ブランキは自らこれを語る、

『一八四八年に於ける普通選擧の早急の請求は念入りの裏切りであつた。地方はブルメエル十八日以來新聞の緘口令のため、僧侶、官僚及貴族の喰物となつてゐた。かゝる隷屬的國民に投票を要求することは彼等の主人の投票を要求するに均しかつた。誠實なる共和主義者は何等の束縛なく、爭論に依て、良心の充分なる解放を遂げ得るまで總選擧の延期を要求した。……一八四八年に共和主義者は五十年の迫害を忘れて、彼等の敵に完全なる自由を賦與した。……其報酬は廛殺であつた。……一八四八年に一年の巴里獨裁を行つてゐたならば、フランス及歷史は四半世紀を節約した事であらう。今後もし、そのため十年必要であつても人々は躊躇すべきではない』と。(24)

要するにブランキの獨裁觀念は間接的にはマキアヴェルリ、直接的にはバブウフ主義の產物であり、實際的にはフランス大革命の影響であり、此れに對する彼の信念を固持せしめたものは就中、一八四八年の革命の經驗であつたのである。

ブランキ的獨裁は又屢、パリ獨裁といはれてゐる。革命が行はれ、暴動が行はれ政權の樹立せらるゝ舞臺が巴里だからである。ブランキに依れば革命は本質的にパリ的行動である。だが、斯るパリ獨裁の觀念はブランキのみの着想ではなく、寧ろ時代の思想であつたのである。何故であるか、蓋し巴里は啻に極度の中央集權下に於ける行政的首府であるのみならず又知識的、道德的中心であり又フランスの心臟でもあつた。勿論、王政復古時代、ルイ・フィリップ時代にはリヨン、グルノオブル等

の地方都市でも幾多の暴動騒擾は起つた。だが何といつても政治行動の中心は巴里である。ナポレオン以來パリは幾多の政治的變革の經驗を有つてゐる。だから革命が其價値其効果を有ち得べき所は巴里である。革命の烽火、一度パリに擧がるや地方都市は是に倣ふ、地方村落は又是に從ふ。革命家が全力をパリに集注し彼等が武力で首都を占領し續いて中央政權を把握せんと欲するのはこれがためである。(25)ルクォルは「政治辭典」の中でいつてゐる『革命を起し、是を終り、國王を作り又廢するものはパリである。パリなくんば國民公會は歐洲を敵として戰へなかつたであらう。パリなければ一七八九年及び一八三〇年の革命は内亂に墮落したであらう。巴里なければ行政權は決して屈伏しないであらう』と。又バインリッヒ・ハイネは奇拔なことを言つてゐる、「フランスで、地方の考へることは僕の兩脚が考へる程度位のことである」と。(26)　以て巴里の重要性が窺はれる。

ブランキの獨裁觀念は眞實の意味に於けるプロレタリヤ獨裁ではない。それはプロレタリヤのための少數革命家の獨裁である。而して此少數者とは既に述べた如く最早ブルジョワジイの傳統に從服する意思と能力を有せず而もプロレタリヤの利益のために献身する「落魄者」と呼ばれる一部のブルジョワと、急進的にして開明なるパリのプロレタリヤから成れるものである。この點に於いて多數者(プロレタリヤ)のための多數者(プロレタリヤ)の獨裁を主唱するマルクスの獨裁觀念と區別せらるゝのである。これ又他方に於いてバブウフ主義と共にブランキズムの異色點であると言はれてゐる。

B.　獨裁の任務

獨裁の任務は(イ)ブルジョワジイとの絶縁、プロレタリヤの武裝(ロ)普通選擧の延期(ハ)國民教化の事業(ニ)教會宗教の破壞、ブルジョワ新聞の抑壓、(ホ)政治的、經濟的、財政的、教育的施設に分れる。

(イ)　ブルジョアジイとの永久的絶縁
並にプロレタリヤの武裝

プロレタリヤ獨裁政治の先決問題はブルジョアジイとの永久的絶縁でなければならぬ。蓋し、從來革命失敗の通因は、プロレタリヤが、政權把握直後、舊來の偶像崇拜及び事大思想に幻惑せられて、舊權力者、ブルジョワ民魁を信頼して、彼等に政權への參加並に其行使を許せしために、一度戰ひとられし權力が彼等のため曲用せられ、遂にプロレタリヤ革命所期の目的を達成せずして終つたからである。それ故にプロレタリヤ革命成就の第一歩は、彼等がかゝるブルジョワジイの陷穽に陷らざるやう極力警戒する事である。ブランキは此問題を一八七〇年十月十日、其經營する機關雜誌 "la Patrie en Danger" の一論文の中で取扱つてゐる。彼は此の中で革命時代に陷り易き國民の重大なる錯誤が、舊來の偶像を保存し、不倶戴天の敵たる舊制度の政治家、民魁に其支配者を求めることにある、蓋し彼等ブルジョワ民魁及政治家は外面、プロレタリヤに迎合し、其實、私有制に戀々として、機を見て、順次、新貴族政治を確立せんと期するものだからである。所謂らく、國民がかくの如く、信念も熟慮も無く而して民主主義のため一本の頭髪も自由の一時間をも決して犧牲に供せざりし、かゝる權力の傀儡、權力の阿諛者を信頼せんと固執する事は何たる愚行であらうか。吾人は一八三

〇年及一八四八年並に九月四日の誤謬を斷じて繰返してはならぬと。彼は次の如く言つてゐる、

『覆滅せられた專制政治と徹底的に絶縁せず、壓迫者の政府に參加せし事によつて知名となり且推薦せられし人達の一人を其頭に戴ける總ての革命は前以て既に滅亡せる革命であり、此革命に着手した人々に對する奸計である』と。(28)

一八五一年二月十日、ブランキはベエル島から一八四八年二月革命記念のため會集せる倫敦亡命ブランキ主義者に送つた祝辭の中で、敗北せし革命の教訓を引用し、更に具體的にブルジョワ共和主義者及社會主義者との絶縁の必要を力説してゐる。又同時にプロレタリヤ武裝の急務を説いてゐる。謂へらく、

『明日の革命を脅す暗礁は如何なるものであるか。昨日の革命が打碎かれた暗礁即ち護民官に變裝せるブルジョワジイの嘆ずべき人望これである。ルドリュ・ロオラン、ルイ・ブラン、クレミュ、ラマルチン、ガルニエ・パゼエ、デュポン・ド・ルュウル、ブロコン、アルベエル、アラゴ、マラアスト。不吉な名簿だ。これが革命を殺した假政府である。一切の不幸の責任、幾千の犧牲者の血汐はその政府の頭上に落つ可きである。反動は唯デモクラシイを殺戮する仕事だけした。……不幸なる政府よ。彼はバリの勞働者を迫害した。四月十五日にはリモオジュの勞働者を投獄した。二十七日にはルウアンの勞働者を射殺した。彼は彼等の死刑執行人を悉く釋放し、總ての眞摯なる共和主義者を嘲弄し、追窮した。裏切りだ。裏切りだ。殆んど革命を破壞した總ゆる災害の恐る可き負擔は彼のみ負ふ可きだ。……來る可き國民勝利の日に、大衆の健忘症的寛大が彼等の信任に違背した人達の一人を權力に昇らしむるならば何たる不幸ぞ。それは再び革命を書餅に歸せしむるものであらう。

勞働者は絶へず、呪はれたる人々の此名簿を目から離してはならぬ。若しその一人でも、暴動のために生れた政府に現はれたならば、異口同音に裏切りと叫ばねばならぬ。

講演、説教、綱領は唯、手品と欺瞞にすぎない。同じ手品師が同じ手品で同じ演技をやるために再び來たにすぎない。彼等はもつと恐ろしい反對の新しい鎖の第一環を形成する。

彼等が今後再び現はれ樣とするならば、彼等を呪へ。彼等の罠に復かゝる愚なる連中に非難と憐憫あれ。二月の手品師を市廳より永久に驅逐する丈では充分ではない。新しき裏切者を警戒すべきである』と。(29)

更にブルジョアジイの武裝解除とプロレタリヤの武裝の必要を説いて曰く、

『プロレタリヤの楯の上に昇ると同時に(イ)ブルジョワ軍の武裝解除(ロ)全勞働階級の武裝及國民軍への組織を行はざる爲政者は裏切者である。

ブルジョワジイの手に一丁の小銃をも殘してはならぬ。

武裝と組織――これ進歩の決定的要素であり、壓迫、不幸と袂別する重大なる手段である。鐵を持つものはパンをも持つ。人は小銃の前に降伏し、群集は武裝を解かれて追ひ散される。武裝した勞働者に充されたフランス、――それは社會主義の到來である。

武裝せるプロレタリヤの面前に於いて、妨害、反抗、不可能――一切のものは姿を消すであらう』(30)

引用は稍冗長の感があるが此れを注意して讀む者は必ずや一八五〇年三月マルクスが書いた共産

主義同盟に對する中央役員會の布告を想起するであらう。寔に兩者の見解は其根本に於て符合せる觀がある。マルクスも亦一八四八年――一八四九年の革命の敗北から將來革命の戰術に幾多の教訓を受けた。ブランキと同じくマルクスも亦革命直後に於いて、勞働階級に差向けられた舊市民軍の再編成に對峙すべく全プロレタリヤの武裝を說きプロレタリヤの組織を要求した。唯一つマルクスはブランキと異なる。即ちそれは、マルクスがプロレタリヤは小市民的民主主義の政權略取を妨ぐる事が出來ないと考へた事である。又マルクスは革命的興奮を可及的長く保存すべき事、換言すれば「永久の革命」を要求した。

二月革命の際、ブランキの戰術は革命的動力を維持するに在つた。而して此革命の痛ましき瓦解は唯だかゝるブランキの見解の正當なりし事をよく證明したに過ぎなかつた。(31)

（ロ）　普通選擧の延期、總ゆる國民議會の排除。

ブランキは革命を直ちに民主的制度の實現と見ず、依然階級闘爭の連續と認むるものである。豫て普通選擧の贊成者たるブランキか、革命直後に於ける普通選擧の即行に反對するのはこれがためである。蓋し革命直後に於ける依然たるプロレタリヤの無知隷屬、腐敗欺瞞を鑑る時、かゝる狀態の下に逸早く性急に普通選擧を施行することは眞に民意を問ふ所以ではなく、却て反動勢力に擡頭の好餌を與ふる事となる。無知なるプロレタリヤを背景とする普通選擧は其活用ではなく却て其濫用である。普通選擧なる兩刃の武器は性急に是を使用する人々を却て傷ける。(32)　吾等は宜しくこれに關する世人の幼稚なる迷妄を警戒すべきである。ブランキは決して普通選擧の盲信者ではなかつた。ブランキをしてかゝる信念を强からしめたものは彼自身の語る如く一八四八年の二月革命の經驗であつた。

ブランキ謂へらく、

『一八四八年に於る普通選擧の早急の請求は念の入つた裏切りであつた。地方は、ブルメエル十八日以來新聞の緘口令のため僧侶官僚及び貴族の餌食となつてゐた。かゝる隷屬的國民の投票を要求することは彼等の支配者の投票を要求するに等しかつた。誠實なる共和主義者は何等の束縛なく爭論に依て良心の充分なる解放を遂げ得るまで總選擧の延期を要求した。この事は一年後の敗北と同樣にその直次の勝利を確信してゐた反動にとつては大恐慌であつた。假政府は誠實なる共和主義者が激怒を以て忍んで來た共和國を、成心あつて反動に引渡した。

革命の翌朝、投票に依賴する事は唯、同樣に有罪なる二個の目的――即ち强迫に依て投票を奪取するか、若くは君主政治を復活するか――を追求する事にすぎぬ。人々は此言葉は少數黨及び暴力論者の見解であると言ふであらう。否、恐怖と壓迫に依て獲得された多數は決して市民の多數ではなく奴隷の群である。それは七十年を通じて、唯一方の言分丈けを聞いた盲目の護民官である。今から七十年を通じて、反對側の言を傾聽すべきであらう。彼等は一共に自己を辯護する事が出來なかつたので今後は代る代る自己を辯護するであらう。

一八四八年に、共和主義者は五十年の迫害を忘れて、彼等の敵に完全なる自由を賦與した。共れは莊嚴にして決定的の時期であつた。此時期は最早再び歸つて來ぬであらう。勝利者は永い且つ無

慘なる損害に抗して、魁をなし、模範を示した。その報酬は何であつたか。慶殺であつた。

一八四八年の巴里獨裁の一年はフランス及歴史のために、其終りに近い四半世紀を節約した事であらう。今後もしそれに十年必要であつても、人々はそれに躊躇すべきではない』と。(33)

ブランキの晩年の著作には普通選擧に有利なる章句が見出される。これは慥かである。だが此事實を以て彼が普通選擧の價値を無條件的に推賞する者であるとするならば、それは輕卒なる即斷であるといふ可きであらう。この問題に對するブランキの堅牢な理論及永年の實驗は毫もかゝる推斷を許さぬのである。ブルジョワ社會並に革命勝利直後に於ける普通選擧の利用はブランキの夢想だにせざる所であつたのである。(34)

革命直後の狂熱的時代にブルジョワジイは何を要求するか。曰く國民意思の表現、直次の投票是である。ブルジョワジイは自由主義の假面を裝ふて、プロレタリヤの運動を沮止し、自己の沒落を必死に防衛するであらう。かゝる事態に際して紊りに普通選擧の美名に誘惑される事は再起の機會を窺へるブルジョワジイに好個の武器を授け、革命を正道に導かず、早くも半途にして瓦解せしむる所以である。革命家の最も戒飾すべき點である。ブランキは斯くの如きブルジョワジイの策動を豫知して事前に其對策を講ぜんとするものである。

ブランキは一八四八年三月七日次の如く謂つてゐる、

『國民議會を直に選擧することは共和國にとつて危險であらう。六十年以來、反革命はフランスに獨笑顔でゐる。新聞紙は國庫法に箝口せられて唯、社會の表皮にしか浸透してゐない。大衆の教育は常に革命の敵に歸屬したし又依然として彼等に歸屬してゐる所の單なる口頭教育に依てなされたものである。……從つて吾等は選擧の無期延期及民主的知識を普及するの任務を有する市民の地方派遣を要求する』と。更に同年三月十四日、尙、其延期の必要を力說していふ、

『都市に於いては、長年月の壓迫と窮乏に依て束縛に慣らされた勞働階級は投票に何等の役割を力めないか、苦くは盲目の動物の如く、其支配者に依て投票に案内されるであらう。地方に於いては、總ての勢力は牧師と貴族の手中に握られてゐる。國民はそれを知らない。國民はそれを知らなければならぬ。此れは一日や一月の仕事ではないであらう。選擧が若し行はれても反動的のものであらう。數百萬の人々をして、彼等自身の救濟のために虛僞を語らしめ、彼等の無能力に乘じて、彼等の奴隷的地位を無理矢理に承認せしむる事は冒瀆行爲である』と。(35)

かくの如くブランキは普通選擧の延期を極力主張するのみならず又國民議會その者に對する世人の過重、換言すれば國民議會の偶像視を嘲笑する。一八七〇年國防政府が正規政府の組織を口實に國民議會を召集すべしと提議した時、ブランキはこの提議に斷乎として抗議した。彼は此抗議書の中で、國民議會の起源に溯り、縷々として歴代の議會の眞相を暴露し、凡そ議會なるものは恒に利慾と低能の權化であることを說いてゐる。彼は謂つている、

『國民議會の方法は一七八九年に始つた。其時期はよいが其方法は平凡である、その方法は其當初に於てすら成功しなかつた。三族會は七月十四日まで、しつかりしてゐた。バスチユの占領は彼等を恐怖せしめた。利己的ブルジョアー彼等は國民の登場を恐怖を以て眺めた。そして實に此時代か

ら、フランスに於いて八十年間總ゆる評議會の不動の基礎をなす、憐む可き、幼稚なる偏見が生じたのである。

立憲議會は宮廷と大衆に對する二重闘爭の三ケ年の後、其退却の時に際しては、反革命の一用具にすぎなかつた。立法議會もそうであつた。それは精力に於て門出し、悶絶に於て終つた。國民公會の名聲は誇張されたが、それも前記年長の二姉と殆んど異る所はなかつた。それは事件に遭つたが、事件を造らず、又それを支配しなかつた。

十九世紀は歴史の眼下に總ゆる權力の足下に蠢動する是等の議會、利慾賤劣の媾曳の永き續物を展開せしむる。利己と腐敗の典型たるルイ・フィリップの悲む可き議會は吾等を呪ふ可き記憶の二つの議會に導く。此議會は吾等をして永久に議會病を嫌惡せしむるものであらう。フランスは普通選擧の是等の見事なる産物のために高價なる犧牲を拂つた。……危機に際會して、總ゆる危險の中で最惡のもの、それが評議會である事をこれは充分に教へるものでなからうか。

宜しく評議會の不幸なる威信と絶緣しなければならない。此威信は八十九年を去る二百年の絶對權力から生れたものである。その榮譽は議會的形式として殘存する。そして欺瞞の殆んど一世紀すらも尙、吾等の迷を覺すに足りないのだ。三族會は一つの効果にすぎなかつた。決して利益ではなかつた。三族會は既に人々の心の中で成就された結果を聲明した。此聲明を終るや否や、時代後れのものとなり、妨害物に變つた。フランスは元來帝王に對して使用すべきであつた國王機關の犧牲となつたのである』と。(36)

ブランキは更に議會の性質を道破していふ『然らば、結局、議會とは何か。それは德や才能、學者の大獻身の集會であるか、人道の精髓或は國民の選良であるか。否、決して。それは無力と利己の集合であつて、そこでは口の達人や巧妙なる惡者、時としては信徒の指揮者や全世界の支配者が牛耳をとる。權力は彼等の手に移る。そしてこの權力の最初の運用は利慾と虚榮を充足せしむる事である』と。(37)

（八）　國民教化の事業

革命の窮局目的は共産主義の實現にある。ブランキに依れば此共産主義は教化の絶對的勝利に依て始めて達成せらるゝ。それは教化の不可避的結果であり、その社會的、政治的表現である。寔に教化は共産主義の絶對不可缺條件である。共産主義はこれに依て始めて可能となる。そは教化の必然的結果であると。(38)

然るにプロレタリヤの現狀は甚しい無知に沈倫してゐることである。無知は同時に奴隷狀態と貧窮を意味する。(39)　かゝる狀態の存する限り共産主義の到來を期する事は出來ない。ブランキ所謂らく、軍隊、政府、基督教、政治組織――これ等は單純なる障礙である。無知は恐るべき稜堡である。……共産主義は破壞せられた稜堡の上に初めて發生するのであらう。無知と共産主義は兩立しない。共産主義なき教化の普及と教化の普及なき共産主義とは二つの同樣なる不可能事であると。(40)

ブランキが革命直後の諸施設中、就中啓蒙事業を重要視する所以は茲にある。ゼヴァエが指摘してゐる通り、凡そブランキ程、大衆に於ける教化普及の効用と恩惠を説く人はない。彼程烈しく無知

をば人類の最惡の災害として難詰する人はない。(41) 革命事業は彼に於いて正しく教化事業である。

然らば共産主義への道に横はる致命的障礙たる無知は何處から生れたのであるか。何に由來するものであるか。曰く教育の缺陷から生れる、而して此教育の缺陷は就中教會的教育に基く。ブランキは謂つてゐる、

『然らば無知は何處から來るか。「教育の缺陷から」と直ぐ人は言ふであらう。余はつけ加へて言ひ度い、無知は就中教會的教育から來る。而して此教會的教育は迷信に依る教育の破壞と民衆の愚化を目的とし且つ結果とするものである』と。(42)

教會的教育論者は自由及節約の口實の下に無料義務教育を却けて自由教育を主張する。彼等はいづれもゼスイット教の代辨者である。かゝる論者は縱令自ら、初めの中は、共和主義者、革命家、無神論者、唯物論者、社會主義者、共産主義者、プルウドン主義者と稱しても、其假面を僞る事は出來ない。彼はゼスイット教信者と呼ぶ事が出來るのだ。國家の干渉なき、無料制を伴はざる自由教育は金權者の手に獨占せられた教育である。かゝる人々の手に委ねられた教育は無知と壓迫を意味する。男女十萬の兵士から成る黑色軍は暗黑を賣物に出し、愚弄者を任命するに汲々としてゐる。彼等は國家の支持を受けて支配し、統治し、威嚇し、壓迫してゐる。俗界の貧乏者は彼に奉仕し、資本は彼等に援助を與てゐる。(43) 宜しくかゝる教育を排除すべきである。かゝる教育の結果はプロレタリヤの無知より外にはない。なるが故にプロレタリヤは自己の苦惱の原因を知らぬ。何故に搾取されてゐるかを知らぬ。彼等は自己の地位を道德的、物質的方面から理解するが、科學的方面から理解しない。彼等は束縛の重さ、抑壓の烈度を感ずるのみ。その機構を說明する事が出來ない。(44) ブランキがプロレタリヤの解放の任務を彼等自身に託せず、ブルジョワ出身の小數の精英なる『落魄者』を信賴するのはプロレタリヤのかゝる無知を看破せるが故である。

それ故にブランキは革命直後の重大任務をプロレタリヤの教化に置く。しかし此教化事業は決して一朝一夕の仕事ではない。彼は此の無知といふ「稜堡」を克服するに尠くとも二十年を要するであらうといつてゐる。(45) 獨裁存續の期間もこれに依て略〻推定されると思ふ。教化事業の完成と共に共産主義は招來される。ブランキは謂ふ、

『共産主義は其案內者、其指導者たる教育と平行して、一歩一歩と前進する。それは、教育普及の御蔭で何人も最早他人の愚弄物たらざるに至る其日に到來するであらう』。(46) 又謂ふ『共産主義は教育普及より自然に到來するであらう。それ以外の方法では決して到來しない』と。(47)

教會主義者は其生存條件たる無知を延長するため戰つてゐる。社會主義の任務は正に其反對である。それは現在の夜から明るい天を蘇生せしめんと欲する。此明るい上天は罪惡と愚昧に對する正義と常識との勝利を照らすのであらう。(48)

（二）　教會、既成宗教の破壞、ブルジョワ新聞の抑壓

革命の敵は應々にして其外部に存せず、却て內部に存する。プロレタリヤの革命的興奮の冷却、即ち是である。頽瀾を既倒に返さんとするブルジョワジイの反抗は單なる實力的抵抗以外に種々なる精神的形態を取る。教會、宗教、新聞等は即ち之である。彼等はかゝる方法に訴へて無知なる大衆

の精神に浸透して、その革命的情熱を冷却喪失せしめ以て革命完成の道を阻止しやうとする。そして是はブルジョワジイの常套手段である。かゝる消息を充分に知悉せるブランキはプロレタリヤの執權と共に既成宗教の排除、教會財産の國有を説き、宗徒を黑色軍隊と呼んで其追放を要求してゐる。曰く、

『先づ革命政府は人類の生來の殺害者としての宗教を撲滅せねばならない。それは政治の第一の義務である。かゝる淨化を行はずしては何事も不可能である』と。(49)

更に獨裁確立後の宗教政策として、彼は『男女黑色軍の放逐、教會男女修道院、僧團等の一切の動不動産の國有』を説いてゐる。

ブランキは無神論者である。彼に於いては、無神論者と共産主義は同一物である。倫敦亡命のブランキ主義者が巴里コムミュン後ブランキの思想を回想して次の如く言つてゐるが、これはブランキの宗教觀をよく傳ふるものである、

『知識と理性とから神を追放せざる限り、人間は永久に自由とならぬだらう。實在、世界及人類彼岸の原理に關する此不可思議なる見解は未知の幻想の産物であり、陰謀に利用される無知に依て創造せられ且つ愚鈍に依て默認されてゐるものであつて、總ゆる不幸の緯を形成する。人類はこの不幸の中でもがく。そして此不可思議なる見解は又人類解放の重なる障礙をなせるものである。神秘的なる神の幻想が世界を蔽へる限り、人類はこの世界を認識することも所有する事もできないであらう。科學と幸福の代りに、人類はそこに、不幸と無知との奴隷狀態のみを發見するのであらう。

神を認識の領域より驅逐すること、神を社會より驅逐することは、科學に到達し、革命の目的を實現せんと欲する人間の義務である。他の總ゆる誤謬の原因となる此誤謬を否認しなければならない。蓋し、數世紀以來人類が屈伏せしめられ、束縛せられ、掠奪せられ、迫害されてゐるのは、このものゝためであるからである』と。(50)

ブランキの立場は啓示宗教及神に對する合理的領域であり、同じく教會を敵視する四十八年の革命家、カルノ、ガルニエ・パゼエルドリユ・ロオラン、ルイ・ブランが依然唯心論者で止つてゐたに反し、ブランキはプルウドンと共に純乎たる無神論者であつた。彼が無神論の背景をなせるものは、科學的研究、十八世紀の哲學、古代史、教父の研究、ルナン、コント等の勞作であつた(51)。

教會、宗教に次いで、ブルジョワ新聞が民衆籠絡の手段として絶大なる役割を努むる事は又ブランキの看過する所ではなかつた。彼は資本家社會に於る出版の自由がブルジョワジイをして唯輿論を荼毒するにすぎないことを認めて次の如く言つてゐる、

『新聞紙、それは資本である。金を有する人は勝手に印刷できる。貧乏人は一新聞の經費に堪ふる事が出來ない。富者は、よかれ、惡しかれ、自分の知識の産物で國を浸す。是等の財政家、有産者、大商人は四十の新聞、百、二百の新聞を支辨することが出來る。それは眞に茶飯事である。プロレタリヤは多少の金でやつて見る、やがて使ひ果す。金持は彼の小さい努力と大金とを冷笑する。彼は王侯の如く行動す。彼は君主の如く支配し且つ振舞ふ』と。(52)

その結果はどうなるか。ブランキ謂へらく、反對派の新聞は市街の壁塀を超へる事は出來ぬ。地

方は全く教師、文盲、大地主の見解を宣傳するに努むる退嬰的新聞の跳梁に委せらるゝのみ。總では吾人に取て不利である。宜しく斯くる形勢を一變しなければならぬ。プロレタリヤの獨裁はかくてブルジョワ新聞を彈壓しなければならない。かくする事に依て、久しく汚濁された輿論はブルジョワジイの毒牙を免かれる事が出來るであらうと。

（ホ）過渡期の方策

イ、經濟的方策　ロ、政治的方策　ハ、財政的方策　ニ、教育的方策

過渡期は共產社會への準備的時代である。この時代は共產主義的施設を即行すべき時期ではなく寧ろ過去より持越しの種々なる障礙物を芟除して將來への道を開くべき時代である。此準備的時代に獨裁政府が施行すべきものとしてブランキの掲ぐる經濟的方策、政治的方策、財政的方策、教育的方策は左の如くである。

イ、經濟的方策

（一）工業及商業の總ての指揮者に命令して、其人事並に給料の狀態を一時の間、現在の儘維持せしむる事、これに違反するものは追放の刑に處す。國家は彼等と商議すべし。總ての所有者が命令拒否の廉に依り追放せられたる場合には代理管理者を置く。

（二）租稅、鑛山、大工業會社、信用及交換機關の問題を整理するため專門會議を召集す。

（三）勞働者組合の基礎を築き上ぐべき會議を開くこと

商工業主に對する命令に依て資本の姦惡なる行爲は回避せらるゝ。最初に於いて、これは重要問題である。勞働者階級は、かくして下層社會以外の所に於いても新なる社會施設を期待することが出來るであらう。』(53)

これに依て見らるゝ如く、ブランキはマルクスの主張する資本の沒收を目的とせず、唯單にその制御、その行動の制限のみを目的としてゐる。更に又彼は工業資本主義のみを眼中に置いて農業資本主義を考慮しなかつた。彼の意圖は工業資本主義の廢止でなく、唯監視であつた。(54)　聊か興味ある點である。

ロ、政治的方策

軍隊及司法官の廢止、上中級官吏の即時廢止、下級官吏の一時的存續、男女全黑色軍隊の追放、教會、修道院、僧團の一切の動產不動產の國有、一八四八年二月廿四日發布の追補的法律に據つて、共和國の一切の敵に對し前記の手段を適用する事、是等の財產及びこれに基く擔保の賣買は向後、一切無効なるべきことを宣言す。

官吏の再組織、刑法典及裁判所の廢止、民事事件に對する仲裁裁判官、刑事事件に對する陪審官の設置、刑罰は犯罪に比例すべく、常に陪審官の良心に依て量定せられ、別段强制的規定を設けず。今後は唯、種々なる刑罰の種類のみを豫め定め置くのみ。

國防軍の編成、勞働者並に共和國々民の一般的武裝

敵には何等の自由を與ふる事なし。(55)

ハ、財政的方策

國債臺帳の廢棄、貯金組合整理委員會の設置、直接及間接稅を廢止して、相續及所得に對する直接累進稅の賦課、

二、公共教育策

第一級、第二級、第三級の三階梯の教育を施す學校の設置』(56)

以上が過渡的方策としてブランキが述べてゐる所のものである。

是等の方策が一度實現せられた曉には、國民は自由となり、民主主義はその論理的法則と化した普通選擧の法則に依て進步し、社會的進化は其正道を辿るであらう。人類の將來、經濟的知識的進化の窮局點、無限の探求と努力の對象たる共產社會は敎育の普及と相俟つて、急速に、緩慢に、まつしぐらに到來するであらう。換言すれば國民の抑壓者は無力となり、敎育は組織せられて僻遠の地、陋屋にまで普及し、社會主義の到來に對する地方民の偏見は消滅し、勞働階級は商工業の經營に參加を要求せられ(57)茲に全人類の自由と幸福とは實現せらるゝであらう。これがブランキの革命觀の要旨である。

ブランキの追求する革命は唯、單に暴力的襲擊や謀叛に在るのではない。又獨裁政治の確立に在るのでもない。それは自由に覺醒せし國民總體の活動であり又あらねばならぬ。

（1）Blanqui, a. a. O., II. s. 92.

（2）Dommanget, ibid., p. 61-62.

（3）Cité dans Dommanget, ibid., p. 62.

（4）Cité dans Zévaès: Blanqui, p. 23.

（5）Blanqui, a. a. O., Bd. II. s. 86.

（6）Blanqui, a. a. O., Bd, s. 86-87.

（7）Blanqui, a. a. O., Bd., II. s. 87.

（8）Blanqui, a. a. O., Bd., I. s. 129.

（9）Zévaès, ibid., p. 138

（10）マルクス、エンゲルス共產黨宣言（大田黑、早川共譯）九二頁

（11）Mason, Edward.—Blanqui and Communism. (Political Science Quarterly. Vol. XLIV. Dec. 1929. p. 507)

（12）Blanqui, MSS. Liasse II. p. 150. Cited by Mason, ibid., p. 507

（13）Blanqui, a. a. O. Bd. I. s. 141.

（14）Mason, ibid., p. 508.

（15）尙此點の詳細は拙稿「バブウフ主義と秘密結社」（三田學會雜誌第二十四卷第六號）參照せられたし。

（16）Dommanget, ibid., p. 84.

（17）Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 30.

（18）Blanqui. a. a. O., Bd., I. s. 119.

（19）Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 119.

（20）Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 131.

（21）De la Hodde,—Histoire des sociétés secrètes et du parti républicain. Paris. 1850, p. 224.

（22）Dommanget, ibid., p. 64-65.

（23）Cité dans Dommanget, ibid., p. 64.

(24) Blanqui, a. a. O., Bd. I, 133-134.

(25) Zévaès; ibid., p. 142. p. 152-153.

(26) Dictionnaire politique, par Duclerc et Pagnerre 1842, p. 206, 395. cité dans Zévaès; ibid p. 153.

(27) Cité dans Zévaès; p. ibid., p. 153.

(28) Dommanget, ibid, p. 66.

(29) Cité dans Dommanget, ibid, p. 66-67.

(30) Cité dans Dommanget, ibid., p. 67-68.

(31) Dommanget, ibid., p. 68-69.

(32) Dommanget, ibid., p. 69.

(33) Blanqui, Kritik der Gesellschaft. Bd. I . s. 133-134.

(34) Dommanget, ibid., p. 69.

(35) Cité dans Dommanget, ibid., p. 70.

(36) Cité dans Dommanget, ibid., p. 70-71.

(37) ibid., p. 71-72.

(38) Blanqui, a. a. O., Bd. II. s. 36

(39) Blanqui, a. a. O., Bd. II, s. 88.

(40) Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 118. s. 115.

(41) Zévaès,—Auguste Blanqui, patriote et socialiste français, Paris, 1920. p. p. 131.

(42) Blanqui, a. a. O., Bd., II. s. 84

(43) Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 116-117.

(44) Blanqui. a. a. O., Bd. II. s. 15.

(45) Blanqui, a. a. O., I. s. 118. s. 134.

(46) Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 119.

(47) Blanqui, a. a. O., Bd., I. s. 121.

(48) Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 123.

(49) Blanqui, a. a. O., Bd. II. s. 61.

(50) Cité dans Dommanget, ibid., p. 73.

(51) Dommanget. bid., p. 73.

(52) Cité dans Dommanget, ibid., p. 74.

(53) Blanqui, a. a. O., Bd. I. s. 131-132.

(54) Zévaès, ibid., p. 144-145.

(55) Blanqui. a. a. C., Bd., I. S. 132.

(56) Blanqui, a. a. O., Bd. I. S. 132-133.

(57) Zévaès, ibid, p. 145.

四、ブランキ文獻小錄

(一) ブランキの遺作

1) L'Armée esclave et opprimée, Paris, 1894.

2) Banquet des Travailleurs socialistes, Président : Auguste Blanqui, Paris, 1849.

3) La Candide, journal, 1865.

4) La Critique sociale, 2 vols, Paris, 1885. Kritik der Gesellschaft. 2 Bde. Leipzig, 1886. Autorisirte deutsche Uebersetzung.

5) Defense du citoyen Louis Auguste Blanqui devant la cour d'Assises, Paris, 1832.

6) L'Éternité dans les astres, Paris, 1872.

7) Manuscrits à la Bibliothèque Nationale. Catalogue des nouvelles acquisitions. 9580 et suiv.

8) Ni Dieu ni maître, journal 1880-1881.

9) La patrie en danger, Paris, 1871.

(二) ブランキに關する研究

1) Biré, Edmond—Un épisode de 1848 (Le Correspondent de janvier 1897)

2) Bouton, Victor—Profil révolutionnaire de L-A Blanqui, par un crayon rouge 1849.

3) Castille, Hippolyte—Portraits politiques et historiques du XIXe siècle : L.-A. Blanqui. Paris, 1857.

4) Chenu,—Les conspirateurs et les sociétés secrètes 1850.

5) Da Costa, charles—Les Blanquistes, Paris, 1912,

6) De la Hodde, L.—Histoire des sociétés secrètes et du parti républicain, Paris 1850.

7) De Monzie,—Blanqui prisonnier politique à Cahors. 1912.

8) Deville, Gabriel—Blanqui libre, Paris, 1878.

9) Dommanget, Maurice—Blanqui, Paris, 1924

10) Flotte, B.—Blanqui et les otages en 1871. Documents historiques. Paris, 1885

11) Fournière, E.—Les theories socialistes au XIXe siècle de Babeuf à Proudhon 1904.

12) Geffroy, Gustave—L'Enfermé. Biographie de Blanqui. Paris, 1897. Édition nouvelle, complétée. Paris, 1926.

13) Girard, F.—Histoire du Mont-Saint-Michel, comme Prison d'Etat. Paris, 1849,

14) Girod de l'Ain,—Rapport sur le procès d'avril 1834.

15) Goryev—Auguste Blanqui. Moskva, 1921.

16) Isambert, G.—Les idees socialistes en France de 1815 à 1848. 1905.

17) Jeanjean, J. F.—Armand Barbès. Paris, 1909..

18) Kritschewsky—Aus A. Blanqui's Leben (Sozialistische Monatshefte. I. Jahrg. 1897.)

19) Lafargue, P.—Auguste Blanqui, souvenirs personels. (La Révolution français 20. Avril. 1879.)

20) Leymarie,—Barbès et Blanqui à Bell-Isle (Nouvelle Revue du Ier juin 1898)

21) Louis, P.—Blanqui und der Blanquismus (Neue Zeit. 19. Jahrg. 1900-1901. Bd. 2.)

22) Mason, Edward S.—Blanqui and Communism (Political Science Quarterly. vol. XLIV. Dec. 1929)

23) Mirecourt, E. de.—Blanqui (Les Contemporains No. 91) Paris 1857.
24) Morange, G.—Les idées communistes dans les sociétés secrètes et dans la presse sous la monarchie de Juillet. Paris, 1905.
25) R,—Blanqui devant les révélations historiques. Bruxelles 1859,
26) Ranc,—Auguste Blanqui (Le Voltaire 3. Janv. 1881)
27) Sencier, G.—La Babouvisme après Bibeuf. Paris, 1912.
28) Stein, Lorenz—Geschichte der sozialen Bewegung in Frankreich.
29) Tchernoff. I.—Le parti républicain sous la monarchie de Juillet. Paris, 1901.
30) Thomas, Al.—Blanqui im Jahre 1834 (Dokumente des Sozialismus. Bd. II)
31) Thoré,—La vérité sur le parti démocratique. 1840.
32) Velichnika,—Blanqui. Moskva, 1921.
33) Wasserman, S.—Les clubs de Barbès et Blanqui en 1848. Paris, 1913.
34) Weill, G.—Histoire du parti républicain en France. Paris, 1928.
35) Zévaès, A.—Auguste Blanqui, patriote et socialiste français. Paris, 1920.
36) 小泉信三、マルクシズムとボルシェヴィズム。和昭四年版
37) 平井新、バブウフ主義と秘密結社（三田學會雜誌第二十四卷六號）

ジエイ・エス・ミルの經濟學方法論

濱田恒一

（一）

セイは「國富論」を評して曰く「スミスの著書は最も明瞭なる實例と、最も珍奇なる統計の觀念とに支持せられ、且つ教訓に滿ちたる幾多の考察を交へたる、最も正しき經濟學上の原理の、雜然たる集合に過ぎずして、完全なる統計學の論著にも非ず、完全なる經濟學の論著にも非ず、その著書は正しき思想と確實なる知識との、雜然として混在せる一大混亂たるなり」と。故に「經濟學」の筆は經濟學の範圍の決定に始る「科學はその研究の及び得る範圍とその研究の目ざす目的とを明確に定め得るに至れる場合に於てのみ、眞の進歩を來し得るものである」（セイ「經濟學」上卷、第三頁、增井幸雄譯）

經濟學は先づ政治學と區別せられる。前者は社會の諸欲望を滿足せしむべき富が、如何に生產され、分配され、消費せらるゝやを教ふる學なるに對し、後者は社會の組織の科學である。固より政治的事項は富の增減に無關係なるものではないが、それは結局、間接的に然るに過ぎずして、本來、